

(葉護と設)とを置きて統治せしめたること

天寶九載(虎の年、七五〇年)には Cik を征し、Kām 河(Yenisei 河の上流)に戦ひて之を降し(?)たる
こと

天寶十載(兔の年、七五一年)には又 Cik を討ち、Irtys 河を渡りて三姓葛邏祿を討ち、Cik 部に Tutuk
(都督)・Ischbara(乙失鉢?)^{〔八二〕}・Tarkan(達干)等の吏を任じ、次で葛邏祿の侵寇を Jütükän に逆撃して之を
破り、其の後天寶十三載?(羊の年、七五五年の前年の記事)の事と思はるゝ記事には、此等の Cik, Karluk^{葛邏祿}
の兩部を亡ぼしたること^{〔八三〕}

等を記せり、茲に掲げたる所は、碑文の中略ぼ疑義無しと思はるゝ章句を拾集したるものなるが、此の以外にも磨
延賚が諸方の戦役に従事したる次第を記せり、然も此等の記事は殘闕せる部の爲に意義の了り得ざるもの多く、
Kirghiz, Tardu 等の部名も見え、之と回鶻とが攻争せしことは疑無けれど、其の關係を明かにする能はず。

此の新史料の示す所によれば、磨延賚の一生は殆ど全く北方諸部族との戦の間に過ぎられたるものなるを知る可
く、其の記載する所にして事實を誤らずとせば、其の父裴羅が略ぼ阿爾臺山脈以東、興安嶺山脈以西の地に互りて
勢力を占めたる後を受けて、Selenga・Orkhon 流域地方を始め、Yenisei 河の上流及び Irtys 河地方に轉戦し、
叛するものを討ち、従はざるものを服し、かくて回鶻の勢力は益々強盛となるに至りしものなるが如し、北方の事
情此の如しとすれば、南方唐の國情大に亂れ、其の累卵の形勢は、回鶻が勢を擧げて乗ずべき絶好の機會なりしに
も拘はらず、可汗は親から其の事に従はず、僅かに子弟部將を遣して南下せしむるに過ぎざりし理由も、初めて解